千葉大学外国語センター「言語文化論叢」　第10号抜刷　2002年７月

日本手話と日本語

佐々木　仁　子，久保田　正　人

日本手話と日本語*

佐々木　仁　子
久保田　正　人

0　はじめに

日本手話ネイティブにとって日本語は第二言語である、という見方がある。本稿はこれに疑問を投げかけ、日本手話における日本語の位置付けを明らかにしようと試みるものである。

1　「言語」の定義

どのような分野の論考においても、キーワードの定義は必要不可欠である。未定義のままキーワードを用いるのは論外であり、そのような論考の主張はまともな検討に値しない。ところが、「言語」が関わる論考には、このような無作法が平然と行われているところがあり、無用な混乱が生じている場合が少なくない。「日本手話話者にとって日本語は第二言語である」というような主張にあっても、「第二言語」とは何か、さらにいえば、「言語」とは何か、そういうことに関する定義が与えられないままであるならば、かかる主張は空虚である。

「言語」は、形式と意味との対応関係に関する知識の総体である。ここでいう形式とは、語、句、節のいずれのレベルにも当てはまり、また聴覚上の形式（音声）であっても、視覚上の形式（文字、手話）であってもよい。ある表現形式がつねにある特定の意味と結びつく、その対応関係の知識の総体を「言語」という。

たとえば次の２つの文を比べてみよう。

(1)　a．花子はカボチャをにている
　　b．花子はカボチャににている

この２つの文は、１音節の助詞が異なるだけの最小対（minimal pair）である。しかし、たった１音が異なるだけでも文全体の意味は大きく異なる。(1a) のように「カボチャを」とくれば「煮ている」であり、(1b) のように「カボチャに」とくれば「似ている」である。１カ所でも

*本論文は、佐々木が、日本手話に関する「言語学的」と称する既存の研究に違和感を持ったことから始まった。そして手話ネイティブから得た実例や文献から得た資料などを久保田のところに持ち込んで議論しているうちに、日本手話が自然言語の本質と共通する性質を数多くもっていることに気づくに至った。そうして作成した草稿に久保田が言語の普遍性に関係することをいくらか補って出来たのが、本論文である。

異なる形式であれば、それに応じて意味も異なり、一カ所でも意味が異なれば、それに応じて形式も異なる、そのような形式と意味の、いわば「関数」に関する知識の総体を、言語というのである。

このような、いわずもがなのことをわざわざ持ち出したのは、たとえば対応関係の一方の側の「表現形式」だけを指して「言語」といい、それにもとづいて、手話が言語であるか、言語でないか、というようなことを論ずることに何の疑問も持っていない論者が少なくないように見えるからである。そのような議論ははじめから空転することが約束されており、それは、畢竟、言語という用語の定義を正面切って試みていないからであると思われる。手話の言語学的研究にたずさわろうとするのであれば、何をおいても、「言語」の定義を明確に提示しておかなければならない。

2 第二言語とは

2.1 外国語と第二言語

議論を進めるにあたって、しばしば混同して用いられている「外国語」と「第二言語」という用語の、もっとも一般的な定義を、Crystal (1992：531) から引用してみることにしよう。

(2) 「外 国 語」：ある国において日常的な意思伝達の手段としての地位をもたない、学校で教えられる、土着のものではない言語。
「第二言語」：土着のものではないが、通常は教育・行政・ビジネスの手段として、意思伝達の目的で広く使用されている言語。

これによれば、「外国語」も「第二言語」も「土着のものではない」という点で「第一言語」と区別される。しかし、日本手話ネイティブにとって日本語はまさしく「土着のもの」にほかならない。したがって、このような定義の上に立てば、「日本手話ネイティブにとって、日本語が第二言語である」という見方は否定されることになる。

これはたんに定義上の問題ではない。というより、まさに定義が問題なのである。定義は経験的に妥当性を判定されるものであり、ア・プリオリに決まっているのではない。本稿が(2)に挙げたクリスタルの定義に与するのは、この定義が経験的に妥当であると判断するからである。したがって、「『日本手話ネイティブにとって、日本語が第二言語である』という見方は容易に否定される」とする本稿の主張に反論するならば、このクリスタルの定義が経験的に妥当ではないということを証明しなければならない。

2.2 「第二言語」と言われる理由

では、なぜ、日本手話ネイティブにとって、日本語が第二言語であるという見方があるのだろうか。これは、手話が自然言語ではないとされてきた歴史的背景と無関係ではない。

1880年ミラノろう教育国際会議において口話法が採択されて以来、ろう教育において手話が禁止される。しかし、1968年にアメリカ人ホルコムが「トータルコミュニケーション」を提唱し、1981年スウェーデン議会がスウェーデン手話をろう者の第一言語、すなわち言語として認め、1983年にバイリンガル教育が始まり、1985年にユネスコで手話を言語として公認することを求める決議がされる。以来、ようやく手話が自然言語として、また、ろう者の第一言語として認められつつあるのである。

もともと、手話が自然言語であるかどうかは、採決で決めるようなものではないのだが、そういうことをしなければならないほどに、ろう教育が未成熟であったということなのである。

米川（2001：98-99）によれば、1993年にスウェーデンで開かれた「ろう教育におけるバイリンガリズム国際会議」において、次のような決議がなされ、世界ろう連盟に提出された。

(3) 現在の手話研究に基づいて、我々は次のような結論に達した。

- 視覚、身振りによる言語としての手話の地位を認めなければならない。言語学者においても、手・腕・眼・顔や体の動きに基づいた手話表現が言語であると認められている。
- 手話は、ろう者の第一言語である。
- 経済・教育・社会生活などあるゆる面に参加し貢献するために、他の人たちと同じように第一言語を使う権利を、ろう者は有している。
- 国のことば（国語）は、ろう者には自然に習得できる言語ではないので、ろう者の第二言語とされる。第二言語は、主に教育によって習得される。
- ろう者は、日常生活において主に手話と国語の書き言葉および話し言葉を使うバイリンガルの立場にある。（以下省略）

前掲の定義と突き合わせて考えてみよう。Crystal（1992）の定義によれば、「学校で教えられる」日本語は「外国語」になる。上の決議によれば、「自然に習得できる言語ではない」、「教育によって習得される」という理由から、「第二言語」とされている。確かに、日本において日本語は「日常的な意思伝達の手段としての地位を」もつ「国語」であることから、「外国語」とは言えない。そこで、「教育・行政・ビジネスの手段として、意思伝達の目的で広く使用されている言語」という定義の「第二言語」のほうが、近い呼び方ということになるのだろう。

従来の定義では、「学校で教えられる」ものは、「外国語」で問題ないはずである。では、「自然に習得できる言語ではない」「教育によって習得される」言語を「第二言語」と言えるのだろうか。また、ろう者は「バイリンガルの立場にある」というが、「バイリンガル」と称されている人々にとって、二つの言語は自然に習得できる言語を指しているのが通例である。要するに、手話を、音声言語を念頭においた従来の定義で捉えること自体に無理があると言うほかない。そういう無理が、なにゆえ、問題視されてこなかったのか。

それは、手話研究が進み、手話研究者の間で「手話は言語である」と認知したい気持ちが先走

り、同時に、手話の言語学的な体系化を急ぐあまり、十分な定義の吟味をしないまま、既存の言語学の用語（とくに先端的な用語）を、安易に手話に当てはめて捉えようとしていたからであると思われる。その様相は、まるで、最新の用語を使って記述しさえすれば問題が解決したかのごとくの振る舞いである。

Crystal（1992：314）は、アメリカ手話（American Sign Language）の研究成果を重視し、手話を「自然で生物学的な基礎を持っている」（p. 309）自然言語として認める立場をとりつつも、手話を「手話自体の観点から」記述することの難しさを次のように述べている。

(4) われわれは、言語を口頭言語あるいは書記言語の構造という観点で考えることにあまりに慣れてしまっているので、完全に異なる媒体が問題となる場合には、一体何が起こっているのかということを把握することは、きわめて困難なのである。

「媒体」が異なるという点で、日本語と日本手話は異なる。しかし、「日本語」という点で、果たして両者は異なるのだろうか。日本手話ネイティブにとって、日本語は一体何であると定義すればよいのだろうか。以下では、日本手話と日本語との関係を見た上で、日本語がどのように位置付けられるのか考察していくことにする。

3 日本手話と日本語の関係

3.1 日本手話と日本語対応手話

「日本手話」は、ろう者の間で自然発生した、日本語とは異なる体系をもつとされる表現形式をいう。それに対して、「日本語対応手話」は、日本語の単語を手話単語に置き換えて、そのまま並べていくので、表現形式が聴覚系の記号か視覚系の記号かの違いだけで、実質的には日本語である。したがって、中途失聴者や難聴者および健聴者によって多く使用されている。但し、日本手話ネイティブがろう者の一割に満たないことと、手話の普及に伴い、さまざまな使い手が交流することなどの事情から考えて、日本手話と日本語対応手話を完全に切り離すことは難しいのが現実である。

日本手話と日本語対応手話に共通の特徴としては、空間に映像のように描写する形式がある。たとえば「雨が降る」というような文は、日本語のように「雨」「が」「降る」という3要素で構成されるのではなく、両手で雨が降る様子が表され、その動きの大きさや激しさで雨の程度も表される。

では、両者のちがいはというと、ひとつには省略可能な程度を挙げることができる。

(5) 日 本 語　昨日家までタクシーで帰った
　　対応手話　昨日＋家＋まで＋タクシー＋帰る
　　日本手話　昨日＋家（まで）＋タクシー（で帰る）

日本語対応手話は手話単語が日本語の語順通りに並べられる。「帰った」の過去時制は、この場合のように「昨日」という過去の時を表す単語がある場合など、文脈によって時制が明らかな場合は省略されるが、「帰る＋終わる」で「帰った」を表すなど、一定の動詞をアスペクト要素として動詞の後に付け足して過去時制を表すことも多い。

一方、日本手話では「帰る」という動詞と「まで」という助詞がない。もちろん、日本手話にも「帰る」という動詞はある。起点を表す「から」、到着点を表す「まで」という助詞もある。ところが、ここではタクシーが家に到着する様子が、まず両手で家の屋根を表現し、次に左手の屋根だけを残し、右手でタクシーを作り、左手に近づける、という形で映像的に描写されるために、「まで」と「帰る」を表す必要がなくなっているのである。このように日本手話の特徴として、文の要素を並べる際に、省略しても別のところから復元できる要素は省略される。したがって、「テレビを見る」の「を」、「耳が痛い」の「が」「私の名前は田中です」の「の」「は」「です」なども存在しない。

そして、接続詞は存在するのだが、例えば「プレゼントを買いに行きたいんですけど、一緒に行ってくれませんか」などは「けど」と逆接にしても、「ので」と理由にしても、かまわないし、意味が文脈から明らかなため、接続詞を省略して「行きたい」だけで止めても問題はない。「くれませんか」も文字通りに否定疑問にすると相手に伝わりにくいため、直接的に「一緒に行く＋お願い」という表現になる。手話は、その性質上、表現形式の微細さに欠けるところもあり、そのために婉曲な言い回しがそれほど得意ではないのである。

なお、時制は日本語対応手話と同様、時を表す単語や文脈あるいは状況からわかる場合は表さない。明示する必要のある場合には、日本語対応手話と同様に「終わる」をつけるなど、手話単語で表したり、口型で表す。口型とは、「帰る」「帰った」の「る」か「た」を口の形で表すものである。

この他、日本手話の最大の特徴は、顔の表情を使うことである。簡単な例をあげよう。例えば、「明日」という同じ手話単語を使っても、表情で疑問を表せば「明日？」となる。しかし、実は、表情と言っても、上体の傾き、頭の動き、顎の位置、眉や目、唇、舌などの動きを組み合わせた複雑な規則が存在し、その非手指動作についてはまだ研究が緒についたばかりである。

3.2 「借用」の関係

上に述べたように、確かに日本手話は日本語とは異なる表現体系を持つが、それは、視覚語と音声語の違いに起因するものであると思われる。日本手話と日本語はドイツ語と英語という関係でもなく、香港における中国語と英語の関係でもない。他の国の手話と音声言語の関係にも同じことが言えるだろうが、日本手話と日本語は発生時において同じ社会的基盤を共有している。つまり同じ日本という国で生まれた日本人の同じ「土着」の言語であると言えるのである。

同じ国土、同じ国の文化、同じ生活空間を共有していれば、発想や感じ方、表現内容も共有できるだろう。ただ一つ表現形式が異なる、と言うこともできるし、そのただ一つ異なる表現形式

の源となる部分で、すなわち音があるかないかという部分での発想や感じ方の違いは大きいとも言えるだろう。言い換えれば、この同じ部分と違う部分を持って関係し合っているのが日本語と日本手話の関係である。

このような関係には言語的にどのようなことが起こるのだろうか。既出の(5)を使って、考えてみよう。

「昨日、家までタクシーで帰った」は、直接間接のちがいはあるが、基本的にその内容のすべてが日本手話で表される。ところが、「田中さんは家までタクシーで帰った」と文脈なしに、いきなり言うとすると、「田中」という部分は指文字で漢字の「田中」と表し、「帰った」は「昨日」という過去時制を表す単語がないため、「帰る」との区別を口型で「た」と表現する必要がある。

この「指文字」と「口型」は日本語からの「借用」である。固有名詞や手話にない語彙は「指文字」で表される。また、熱いと冷たい、アイロンとクリーニングなどは同じ手話単語を使うのだが、そのように同じ手話単語を使うものは「アツイ」「ツメタイ」と口型を添えて区別する。日本手話には日本語からの「借用」が多く存在し、一方、日本語には日本手話からの「借用」はない。これは日本手話の表現能力が日本語に比べて低い、というよりも、日本において圧倒的多数の日本人が音声語である日本語を使い、圧倒的少数の日本人が日本手話を使うという社会的な要因によると考えた方が正しいだろう。

3.3　語順

市田（1998）によれば、日本手話の語順は日本語と同じSOVであり、すべての語順パラメーターでOV言語の普遍的傾向を備えている。それまで名詞前方型と名詞後方型の両方があるとされていた形容詞と関係節についても「内位主要部型」で説明し、異なるのは「見かけ上の語順」であるとしている。さらに、「内位主要部型」の存在が、日本手話の「見かけ上の語順の複雑さ」と「音声日本語との顕著な違いを生んでいる」という。

市田（1998）の主張を支える具体的な分析には、必ずしも妥当であるとは思われないところもあるが、日本手話の語順が日本語と違うように見えるのは「見かけ上」のことであるという主張は正しい方向を向いていると思われる。

ここでは、市田が検討したのとはちがうタイプの実例にもとづいて、その「見かけ上」の違いを見てみることにしよう。

(6)　日 本 語　　いつ英国から帰る？
　　日本手話　　英国＋そこ＋帰る＋いつ＋疑問の表情

このような例から、日本手話の語順は日本語と非常に異なる、と一般に言われることがあるが、そのままの語順で、「英国、場所について言っているのだが、そこから帰るのはいつ？」と言い換えることができるという事実にも注目すべきである。つまり、これは、ごくふつうの日本語の

語順と同じなのである。

「から」という起点の助詞が抜けているが、「帰る」の手話表現自体の中に起点、終点の方向が含まれているから、容易に復元可能である。また、「そこ」と示すのは、「英国人」でも「英国の」でもなく〈場所〉であることを明確に示すために必要であったからであると考えられる。

(6)の例ではwh語が用いられているが、この点についてもう少し詳しく見てみたい。なお、日本語には単独でwh語に相当する語彙はない（「誰」は「誰でもいい」のように不定名詞として機能するのが基本で、これに疑問要素が付随してはじめてwhoに相当する語彙として機能する）のだが、ここでは疑問文に用いられた「だれ」「どこ」「なに」などを便宜上「wh語」と称することにする。

日本手話におけるwh語は、日本語とまったく同じで、そのままの位置あるいは文末に生じる。(7)に用例をあげるが、実際には手話以外に非手指動作を伴う。ここではそれについては触れない。

(7) 日 本 語　何を買いましたか？
　　日本手話　①何＋買う＋PT-2
　　②買う＋何？

「何」という表現について、①が目的語＋動詞の文法関係をそのまま保持した位置で、②が文末に生じた例である。①は「何を買ったの？　あなた」、②は「買ったのは何？」となり、いずれの語順も日本語に存在するものである。なお、①のPT-2とは、二人称の指差しを意味し、誰について述べているのかを示す重要な要素である。

疑問詞が文末に生ずる場合、疑問を表す文ではなく、「疑似分裂文」になることもある。次の(8)の例を見てみよう。

(8) a．日 本 語　今日の勉強は○○です。
　　日本手話　今日＋勉強＋何？　○○。
　　b．日 本 語　手話で語って下さるのは○○さんです。
　　日本手話　手話＋説明＋もらう＋誰？　○○。

それぞれの手話は、「今日、勉強するのは何かというと、○○です」「手話で説明してもらう（くれる）のは誰かというと、○○です」という日本語に直すことができる。つまり、これらも日本語として存在する語順の文なのである。

既出(7)の②のように、wh語が文末に生ずることは、手話にあってはどうやら普遍的な現象であるらしい。アメリカ手話においても、英語の本来の語順とちがって、疑問詞は、通例、文末に置かれる（cf. Neidel, Kegl, MacLaughlin, Bahan and Lee 2000）。

(9) a. WHO LOVE JOHN
'Who loves John ?'
b. ϕ LOVE JOHN WHO
'Who loves John ?'

(10) a. JOHN LOVE WHO
'Who does John love ?'
b. ＊WHO JOHN LOVE ϕ
'Who does John love ?'

この4つの文のうち、アメリカ手話として容認されるのは（9a、b）と（10a）の3つである。いずれもwh語がはじめからある位置のままであるか、文末に後置されたものである。それに対して、（10b）のように、本来的な位置から外して文頭に前置させた文は容認不可能となる。

（9a）のようにwh語が文頭に生じている文に関しては、いくつかの制約がある。代表的なものとしては、文の始まりから最後まで、顔の表情を含むジェスチャー（Nonmanual marking）で疑問文であることを表示し続けなければならない点が挙げられる。wh語が文末にある文については、そのwh語の部分に疑問のジェスチャーを添えるだけでもよい。

さらに、もともとは文末にあるwh語を文頭に前置することもできないわけではないが、そのためには、文末の位置に同じwh語を残しておくことが条件となる。

(11) WHAT, JOHN BUY WHAT
'What, what did John buy ?'

(11)のような文における文頭のwh語は、おそらくは、文末のwh語が移動したものというより、むしろ転写（copy）されたものと考えるべきではないかと思われるが、いずれにしても、アメリカ手話ではwh語が文末に生ずるのが通例の形である。

日本手話でもアメリカ手話でも、wh語が文末に生ずる傾向があるのは、旧情報―新情報という情報構造の基本語順を素直に反映したものであると考えるべきではないかと思われる。その証拠に、wh語でなくても、新情報を担う要素は文末に生ずるからである。次の文では not が最重要の情報である。

(12) a. JOHN GO SHOULD NOT
'John should not go'
b. ＊JOHN NOT GO SHOULD

驚くべきは、（12a）がそっくりそのまま日本語になる語順であるという点である。

(13) JOHN　　GO　SHOULD　NOT
　　ジョン(は)　行く　べき(で)　ない

日本語が情報構造をよく反映した語順の言語であることはよく知られているが、手話もじつによく情報構造を反映している。その点からすれば、手話は自然言語と同じ原理を共有しているといえるのである。

次に、関係節と形容詞の語順について、市田（1998）の例文を引用して見てみることにしよう。

(14) a．[田中] [鈴木　作る　弁当　食べる]
　　(田中さんは鈴木さんが作った弁当を食べる)
　　b．[田中] [鈴木　弁当　作る] [食べる]
　　c．[田中] [おいしい　弁当　買う]
　　(田中さんがおいしい弁当を買う)
　　d．[田中] [弁当　おいしい] [買う]

(14a) と (14c) が日本語と語順が同じで、(14b) と (14d) が従属節内の語順に変化がないまま関係詞節をつくっているものである。この後者の存在によって、「見かけ上」の違いが生じるとされる。

ところが、(14b) と (14d) は、そのままの語順でごくふつうの日本語になおすことができる点に注意しなければならない。この2つの文は、「田中さんは、鈴木さんが弁当を作ったんですけど、(それを) 食べるんです」、「田中さんは弁当を、(これは) おいしいんですけど、食べるんです」となり、市田（1998）とちがって、[鈴木　弁当　食べる] や [弁当　おいしい] を関係詞節としてではなく、むしろ挿入句として解釈すると、かえって自然な日本文になるのである。もとより、問題の節が関係詞節であることを示す証拠はないのである。

次に、形容詞と名詞の語順について、筆者らの知る範囲ではこれまでどの文献でも検討されたことのない一つの重要な事実を指摘したい。

米内山明宏監修、緒方英秋著（2001）『わかりやすい手話辞典』の形容詞をすべて拾い挙げ、用例のあるものを一つずつ調べたところ、形容詞と名詞の語順に関して、次の3種類のものに分類できた。

(15) A）[洋服きたない]（きたない洋服）、[本厚い]（厚い本）、[部屋広い]（広い部屋）、[テレビつまらない]（つまらないテレビ）、[足太い]（太い足）
　　B）[赤い花]（赤い花）、[白いハンカチ]（白いハンカチ）、[苦い薬]（苦い薬）、[大切な本]（大切な本）

C）［おもしろい本］（＝漫画）、［黒い鳥］（＝鳥）、［温かい日本酒］（＝熱燗）

A）は形容詞が後方にくるもの、B）は前方にくるもの、C）は形容詞が前方にきて、複合的に別の一つの名詞を表すに至っているものである。ここには何か規則性がありそうである。「厚い」「広い」「太い」などについては、もう少し調査の必要があるが、例えば、「きたない」は「洋服」の属性ではなく、一時的な状態である。同じく、「つまらない」は「テレビ（番組）」すべてがつまらないものであるという総称用法ではなく、たまたま見た番組がつまらないという意である。そのような番組でもおもしろくなる可能性はある。それに対して、「赤い」は「花」の属性である。「苦い」も「薬」の属性として一般に認知されているとしてよい。「漫画」というものも、たまたまおもしろい本を指すのではなく、おもしろさが属性である本を指している。

このような語順による意味の違いは、「白き○○が」と「○○の白きが」というような日本語表現を思い起こさせる。このような表現でも形容詞が後方にある場合は一時的な性質・状態を表すようである。

この形容詞と名詞の語順によって異なる意味が生ずることが、なぜ、重要かというと、これもまた自然言語に見られる性質だからである。次の英語の表現を見てみよう。

(16) a．visible stars
　　b．stars visible

形容詞が前方にある visible stars は「肉眼で見ることができる星」、すなわち 6 等星以上の明るさをもった星のことを指す。一方、形容詞が後方にある stars visible は「（天気がよくて、一時的に）見えている星」である。同様に、

(17) a．There are some sick people aboard.
　　b．There are some people sick aboard.

のような文においても、(17a) の sick people は「病弱な人々」の意で、(17b) の people sick は「（船酔いで）気分の悪くなった人々」の意である。

つまり、日本手話に見られる形容詞と名詞の語順による意味の違いは、自然言語に見られる形式と意味の対応関係のありかたとそっくりなのである。ここまでくると、手話が自然言語であるかどうかという問いにたいしても、一つの回答をはっきり示しているといってよいと思われる。

以上を総括すると、表現形式が聴覚系の記号か視覚系の記号かという違いは、確かに「見かけ上」の違いとなって現われてはいるものの、よく見るといずれの語順も日本語として、もっというと自然言語として、受容可能なものばかりである。したがって、媒体が違っても本質的に同じものである、というのがまさに日本手話と日本語の関係であるといってよいと思われる。

4　日本手話ネイティブにとって日本語とは

以上、見てきたように日本手話ネイティブにとって日本語はいわゆる第二言語ではなく、第二言語以上のものである。そして、日本語からの一方的な「借用」関係が存在する。それは、日本語と日本手話との社会的力関係、および、音声語と手話の言語的能力の違いをも表している。だが、そこには意思疎通における優劣はないと思われる。むしろ、日本手話は単純に見えて、実は豊かな非手指表現のほかに、語順やロールシフトなど、体系だった複雑な規則があり、音声日本語から見れば不足だと感じる部分も、別の面で補って、過不足なく意思疎通が行われているようである。

ただ、音声日本語優位の社会においては、日本語は「借用」ということ以上に強い社会的影響力を持つようである。次の例を見てみよう。

(18)　日 本 語　　家族は何人ですか。
　　日本手話　　家＋人々＋いくつ＋人

日本手話では、名詞と組合わさった疑問詞は、日本語と逆になり、「何時」「何歳」は「時＋いくつ」「年＋いくつ」で表されるのだが、(18)では日本語と同じ語順になっている。その理由について考えてみたい。

まず、日本手話には「冊」「枚」「匹」などの助数詞がないため、それらは普通、数詞だけで表される。ところが、上の例では「何人」の「人」が表されている。しかも、これは指で漢字の「人」を空中に書くもので、日本語からの借用である。「人」は「新人」「他人」「知人」などにおいても用いられる。

日本手話ネイティブによると、(18)のような例で「人」を付けなくても意思疎通には問題がないらしい。そうすると、「家＋人々＋いくつ」だけでもよいことになり、［人々＋いくつ］となるから、これは「時＋いくつ」「年＋いくつ」の語順と同じだと考えることができる。手話では、誤解が生じないように、分類詞はできるだけ早く提示する必要があるために、このような語順になっていると考えられる。また、日本手話では省略できるものは省略し、必要最小限のものだけで表現する傾向があることは既に見てきたとおりである。

そうであるならば、(18)のような例でも「人」を付けなくてもよいはずであることになるが、現実には「人」をつけるのが一般的だということで、理由はわからないということである。

したがって、文法的にはこれは例外ではなく、意思疎通にも問題がないにもかかわらず、「人」を「借用」でわざわざ付加するのだということになる。家族の人数を尋ねる場合には丁寧さを必要とするため、その丁寧さを「人」で補ったのだろうか。いや、日本手話でも丁寧さは、態度や表情、文の表し方で表現できる。それでも、不足を感じてか、必要に迫られてか、あるいは気付かぬほどに自然にか、「人」を日本語から借用して定着しているという事実は、日本手話にとっ

て日本語が異なる言語として傍らに存在するのではなく、共通の基盤の上に成り立っている表現形式であるというしかない。

以上のすべての考察を総合すると、次のような結論に至りつく。

日本手話は自然言語である。そしてそれは日本語である。

参考資料

1　NHKワンポイント手話（http://www.nhk.or.jp/fukushi/one_syuwa/one_shu10. html）
2　リコー手話クラブQ＆A　日本手話と日本語対応手話（http://www.ricoh.co.jp/shuwa/nihon.html）
3　NHKみんなの手話（http://www.nhk.or.jp/fukushi/syuwa/syuwa.html）

参考文献

David Crystal（1992）「言語学百科事典」、大修館書店。
市田泰弘（1998）「日本手話の名詞句内の語順について」「日本手話学会第24回大会予稿集」。
――.（2000）「日本手話のイントネーション」、AA研。
木村晴美・市田泰弘（2001）「はじめての手話」、日本文芸社。
市田泰弘（2001）「日本手話の非手指動作の基本タイプについて」「日本手話学会第27回大会予稿集」。
Neidle. C., J. Kegl. D. MacLaughlin. B. Bahan and R.G. Lee（2000）*The Syntax of American Sign Language-Functional Categories and Hierarchical Structure.* London: The MIT Press.
米内山明宏監修、緒方英秋（2001）「わかりやすい手話辞典」、ナツメ社。
米川明彦（2002）「手話ということば―もう一つの日本の言語」、PHP研究所。